

「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行
第1回業務推進全体会合
議事録

日時：平成26年5月2日（金） 13：00～15：30

場所：TKP スター会議室根津

出席者：18名（順不同・敬称略）

木村_浩（PONPO）、足立（元気ネット）、植木（元気ネット）、円満字（PONPO）、
大石（PONPO）、神崎（PONPO）、鬼沢（元気ネット）、木村_謙（東大）、久保（PONPO）、
佐田（JAEA）、篠田（若狭湾エネ研）、渋谷（元気ネット）、竹中（PONPO）、
中岡（元気ネット）、平野（学習院大）、丸山（PONPO）、
三谷（原子力コミュニケーションズ）、諸葛（PONPO）

配布資料

- 1-0. 議事次第
- 1-1. 平成25年度報告書（概略）
- 1-2. 平成26年度業務計画書（一部抜粋）
- 1-3. 平成26年度メンバー一覧
- 1-4. 平成25年度成果報告書（一部抜粋）

議題

1. 平成25年度業務報告、平成26年度の計画について
2. フォーラム後インタビューの分析、フォーラムのシステム化について
3. その他

※議論の詳細については、逐語録に記録されている。

1. 平成 25 年度業務報告、平成 26 年度の計画について（配布資料 1-1、1-2、1-3）

木村_浩氏より、資料 1-1 に基づき、平成 25 年度の業務報告がなされた。

- ・ 今年度末は、今年度の報告書に加え、プロジェクト全体のまとめの報告書も作る必要があるだろう。その際は、過去 2 年度の報告書も見直し、特に、「フォーラム」が従来の手法と異なる点を明確にし、記載すべきだ。

次に、木村_浩氏より、資料 1-2 に基づき、平成 26 年度の業務計画が紹介された。

- ・ DP 等の知見を有している大阪大学の先生に、外部評価委員に加わっていただければどうか。

2. フォーラム後インタビューの分析、フォーラムのシステム化について（配布資料 1-4）

竹中氏より、資料 1-4 に基づき、フォーラム後インタビューの分析結果が紹介された。次に、木村_浩氏より、フォーラムのシステム化に関する説明がなされた。特にフォーラム後インタビューの分析結果について、活発な議論が行われた。以下に主な意見を示す。

首都圏住民参加者の分析結果

(ア) 原子力・エネルギー全般について

- ・ 「程度の強い反対」「部分的な反対」「賛成」に分けているが、「賛成」は強すぎるのではないか（「部分的賛成」または「容認」程度か）。

(イ) 原子カムラについて

- ・ 「フォーラム前から原子カムラのイメージを持っていた方」と「フォーラム後にイメージを持つようになった方」の「原子カムラのイメージ」は、同じものか、異なるものか。
→変容のきっかけを詳細に分析すれば、分かるかもしれない。（ただし、原子カムラのイメージについて話し合ったのは第 1 回、第 2 回がメインであり、参加者の記憶が薄れてしまっているという問題はある）

(ウ) 原子力の専門家（お互い）について

- ・ 「自分にとって都合の悪いことを発言する人は信頼できる」という社会心理学の知見に一致する結果だ。
- ・ フォーラム前は専門家を信頼していた方が、フォーラム後信頼が少し落ちた理由は何か。
→その方の「専門家像」にそぐわない発言があったため。具体的には、その方は専門家に強い責任感を求めていたが、他人事のような話し方をする学会員参加者がいたため。
- ・ 分析結果から、市民は、専門家の中に自分と似ているところがあると分かり合える、と思っていると見える。これは重要なステップではあるが、専門家は「分かってもらおう」

ために市民に「近づくだけ」でいいわけではない、という点に注意が必要であろう。

→市民が専門家に近づこうとする態度変容も見られた。(オ) にまとめている。

(エ) 市民（自分たち）について

- ・ 原子力学会員参加者は、他の原子力学会員参加者に対する意見を持っていた（原子力専門家一般に対する意見は変化なし）。首都圏住民参加者は、他の首都圏住民参加者に対する意見をあまり持たなかった（市民一般に対する意見も変化なし）。これは、原子力学会員参加者は「理想の専門家像」を強く持っているのに対し、首都圏住民参加者は「理想の市民像」をあまり持っていないため、他の首都圏住民参加者に対する評価を下しくいためと思われる。

(オ) 自分自身について

- ・ 図の人数の表記が分かりにくいので、修正すべき。
- ・ 「専門家の考え方を理解できた」の「理解」は、「認識」のレベルなのか、「許容」のレベルなのか。「理解」という言葉を軽々しく使うべきではない。
→「認識」のレベルだったと記憶している。再度整理したい。
- ・ まず、お互いの差を「認識」する、しないの段階があり、次に、その差を許容できないと判断する、もしくは、許容できると判断し、そのための努力をする、という「行動」の段階に移るのではないか。

原子力学会員参加者の分析結果

(ア) 原子力・エネルギー全般について

- ・ 首都圏住民参加者が「原子力に対して否定的な発言をしている専門家がいた」と言っているにも関わらず、ここでは全員が「原子力は必要」と答えているのはなぜか。
→原子力を全面的に否定する学会員参加者はいなかったが、意見が分かれる点もあった（例えば、20年後はなくなっているかもしれない、など）。首都圏住民参加者は、そういった発言を「否定的」と捉えたのであろう。

(ウ) 市民（お互い）について

- ・ 図 3-40 に「部分的には分かり合える、同じ価値観」「部分的にはギャップがある」とまとめられているが、「同じ価値観の部分がある」と感じた学会員参加者は 1 名のみのだから、「ギャップが多い」とすべきではないか。

(エ) 原子力の専門家（自分たち）について

- ・ 原子力学会員参加者は、他の学会員参加者に対する意見は持っているにも関わらず、原子力の専門家一般に対する意見を変えないのはなぜか。
→フォーラムに参加している学会員は特殊な事例だと捉えているのかもしれない。日頃接する多くの専門家を見て、すでに「専門家像」が固まっているのではないか。

(オ) 自分自身について

- ・ 図の人数の表記が分かりにくいので、修正すべき。

フォーラムのシステム化について

- フォーラムは、「コミュニケーションが取れるようになるまでの 5 つのプロセス」のどこまでを目的とするのか。
→プロセス 5 までを目的にする予定。フォーラム参加者に、最初から「コミュニケーションが取れるようになるまでの 5 つのプロセス」を提示し、目指すところを把握していただいた上で、話し合いに臨んでいただく。その結果を見て、フォーラムの機能の限界を評価したい。
- 「コミュニケーションが取れるようになるまでの 5 つのプロセス」は、1～5 の順に達成されるものと考えているのか。順不同ならば、箇条書きにすべきではないか。
- 同じ人でも、話すテーマによって「コミュニケーションが取れるようになるまでの 5 つのプロセス」の達成度が変わってくる可能性があるだろう。
→情報量に差がある二者間のコミュニケーションの成立可能性を探りたいので、あまりにも一般的な話題は適さない。また、昨年度同様、運営側がテーマの誘導をしてはならない。

以上の議論を踏まえ、今年度のインタビューの方法、システム化の検討方法を設計していくことになった。

3. その他

木村^浩氏より、今後の業務推進全体会合のスケジュールが紹介された。

- 第 2 回は 8 月実施予定。フォーラムの結果を報告する予定である。
- 第 3 回は 10 月実施予定。フォーラム後インタビューの結果を報告する予定である。
- 第 4 回は 12 月実施予定。年度末実施予定のシンポジウムの準備を行う予定である。
- 第 5 回は 2015 年 3 月実施予定。平成 26 年度の成果を取りまとめる予定である。

以上